

私たちは何をすべきか

7 リコーがなぜ生物多様性を保全するのか



益子 晴光
MASHIKO Harumitsu

株式会社リコー
社会環境本部/環境コミュニケーション推進室/室長

環境先進企業として知られるリコー。しかし、その事業活動と生物多様性の保全までは簡単には結びつかない。なぜ、リコーは生物多様性の保全に取り組むのか。また、今後どのように取り組んで行こうとしているのか。

環境社会貢献活動のきっかけ

最初に「生物多様性」という言葉を聞いたとき、この意味するものが何なのかが浮かんできませんでした。心にすら響きません。biodiversityの直訳であり、作られた漢語であるところが理由かもしれません。もしも、大和言葉で表したらどんな言葉になるのでしょうか。八百万の神、生き物の連なり、自然の恵み…。これらの意味をすべて包含するような概念かもしれません。言い換えた言葉が宗教的になってしまうのは、これ無くして人は生きていけないということが背景にありそうです。

リコーという会社が、生物多様性に関わる活動を開始したのは1999年に遡ります。「森林生態系保全プロジェクト」として世界の貴重な森の保全を開始し、「環境ボランティアリーダー養成プログラム」によって、身近な自然環境の保全に目を向けることを社員に薦めたのです。2002年からは、リコーグループの各事業所組織が生態系保全のための森林保全活動を始めました。この活動はその後生物多様性に寄与する活動に変更され、2009年度には全世界のリコーグループの組織で計738件、延べ16,760人が参加する規模になりました。

こういう活動が1999年に開始されたきっかけは、環境に対する思いの強い社員がいたことです。その社員は地球の各地で起きている生き物の悲惨な状況を見聞きして、「このままではいけない。行動を開始しなければ!」と考えました。早速、上司に相談して環境部門へ異動しました。その当時のリコーは、環境社会貢献について会社として取り組む体制がま

だ整っておりませんでした。そのために、まず環境NGOに入会しました。そのころは、まだまだ企業とNGOは対立の構図で語られることが多い時代でした。そんな時代に主だった環境NGOの門をくぐり、会合や活動に参加し信頼を得て、環境に対する先端情報や本質的な考え方の薫陶を得ました。環境社会貢献といえば、ゴミ拾い、植林(緑化、水源林、森林資源)という時代だったと思います。その時代にこのような背景によって、リコーの環境社会貢献は“森林生態系保全”をテーマにしたのです。

森林生態系の保全

植林と森林生態系保全は似ていますが同じではありません。全体と部分というような違いがあります。森を育むときの一つの作業として植林があります。「育林が大事なものであって植えることが大事なのではない」というNGOの指摘や、「植えるよりも下草刈りなどの作業が大変」という森林を管理する立場の方からの意見を聞いたことがあります。

森林生態系は地球上の種々の生態系の中でも生



写真1.2 地球カレンダーをもとに、地球環境の今の成り立ちを学び生き物の視点になって考えるフィールドワーク「環境ボランティアリーダー養成プログラム」



写真3 シベリアタイガ保全プロジェクトにおける夏のピギン川



写真4 シベリアタイガ保全プロジェクトにおけるハバロフスク地方のアムール川

物種が多様で数多くの生き物が住むと言われていす。多くの生き物の住処である森林は、ニュースなどでよく見聞するように、現在危機にさらされています。木材資源としての伐採、農地としての土地開発、地元の人たちの開拓、火災などの様々な事情で侵食を受けています。木材の供給という観点では、伐採したところに植林をして苗が育てば問題は解決しますが、生態系という意味ではどうでしょうか。

昔、フィリピンの山奥で植物学者に「この大きな木を伐採したら、この木があることによって生きている多くの生き物がいなくなる。この木の陰でこそ生きていける生き物が生きていけなくなる。だから木を植えて何十年か後に同じ大ききまで育ち、一見同じようになったとしても『同じ森になった』とは言えないのだ」ということを教わりました。生態系保全活動というのはこういうことだと理解しています。

生物多様性を保全することは、単に樹木の集まりとしての森を維持するのではなく、生息する生き物全体を守っていくことなのです。森が森として存在し続けるためには、いろいろな生き物とその生態系の中での役割を全うできる状態が維持されて初めて実現できるということなのです。植物の花を受粉させる昆虫が育つための植物が存在する。その植物が育つための微生物が存在する。その植物の種を運ぶ動物や鳥がいる。そういう自然のシステムが機能してこそ森林は存在し続けることができます。

このように私たちは環境NGOから、「ある生き物そのものを守るのではなく、その生き物が生き続けられる環境・生態系を守る」ということの大事さを教わりました。これが生態系保全です。

リコーの森林生態系保全プロジェクトはこういう考え方で計画されており、それぞれの地域特性や社会

事情にあわせて活動をしています。2009年度に実施したプロジェクトは、長野県黒姫、沖縄県やんばる、ロシア沿海州、アフリカガーナ、マレーシアボルネオ、フィリピン、中国雲南省、ブラジルの8ヶ所です。

シベリアタイガ保全プロジェクト

ロシア沿海州のシベリアタイガ保全プロジェクトはアムール川支流のピギン川流域で、福島県と同じくらいの広さの地域で実施しており、世界で400~500頭残っていると推定されるアムール川の1割が生息していると言われています。この他にもアカシカ、ツキノワグマ、ヒグマ、カワウソ、イノシシ、オオヤマネコなどが生息しています。この地域にはウデヘという先住民族が住んでおり、今後も豊かな自然の残る森の中で生活していきたいと願っています。一方、日本、韓国、中国に近いことから木材資源の供給地という期待も高く、これまで幾度となく伐採の危機にさらされてきたという土地でもあります。

この土地に多いチョウセンゴヨウマツは木材としての価値も高いのですが、その松の実が多くの生き物を養っていることから、伐採された場合には生態系に大きな影響を与えます。また、ここに住むアムール川は貴重な種ですが、プロジェクトはこういった一つの種を保護することが目的ではありません。アムール川が食べていけるだけのシカやイノシシがいて、シカやイノシシが生きていけるだけの食べ物(植物)があり、その植物が茂る環境を保全していこうということなのです。この地域をユネスコ世界遺産登録することにより保全の枠組みを構築しようとしています。

リコーで環境社会貢献を全社施策として立案するにあたっては、環境NGOなど環境の専門家の意見を

もとに、地球環境からみて本質的な活動である生態系保全を目的として、一番生物種が多いと言われる森林保全プロジェクトを組織活動として行っています。

環境負荷削減活動

以上の内容は地球環境に対してのポジティブな活動ですが、ネガティブな影響を減らす活動として環境負荷削減活動があります。事業で発生する環境負荷を低減する活動をしばしば「環境保全活動」と呼びますが、では環境保全とはどういう意味でしょうか。温室効果ガスの排出を1kg低減すれば良いのでしょうか。10%低減すれば環境保全活動と言えるのでしょうか。効率を上げれば良いのでしょうか。保全する対象を地球環境とすると、そんなに簡単なことではありません。

環境保全活動を行う目的を、私たちが地球環境の下で生活し続けるため(生存するため)だとすると、その目的にかなうだけの活動がなされるのかということが問題になります。どんなに努力し、苦勞したとしても、その状態に届かない活動であったとしたら、結果として求める状態(持続可能な社会)が実現しないということになります。持続可能な社会を実現できるレベルになってこそ環境保全活動と言えるのです。では、どのレベルまで環境負荷を削減すればその目的を達成できるのでしょうか。

私たちが進める環境保全活動が“実効”のある環境保全活動であるために、2005年に長期環境ビジョンを立てました。「3Psバランス(地球の再生能力の範囲内の活動にする)」と名付けた姿の実現を狙って、2050年には、社会から発生する環境影響を地球環境の再生能力の範囲に抑えることを目指しています。

地球環境の再生能力を踏まえた環境影響の許容レベルを算出するにあたっては、人口推移予測、平等を考慮し、先進国と発展途上国を分けて考え、先進国は1人当たり現在の1/8というレベルになることが必要だという結果になりました。私たちはこの認識をもとに、温暖化ガスや資源などの項目について2050年に達成する目標を立てています。環境負荷削減活動については、このように持続可能な社会の実現を目的として目標とするレベルを展望しています。

生物多様性への影響評価

生物多様性についても、私たちの事業の各ステージで発生する生物多様性への影響を定量評価し、どの部分の何が影響が大きいのか把握できれば、影響の大きいものから優先順位をつけて影響を削減す

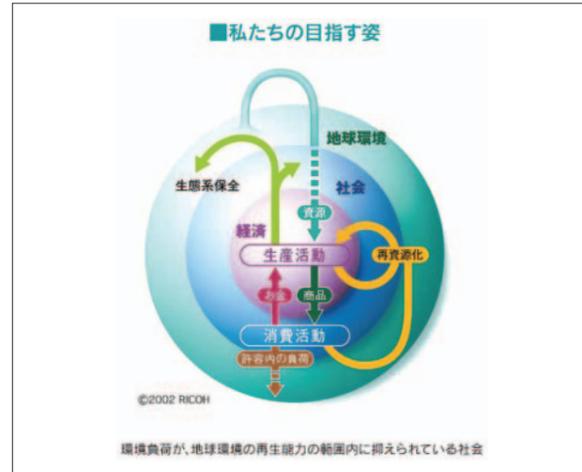


図1 3Psバランス

る活動ができますし、その影響の削減目標も立てることができます。また、すべての生物多様性に対する影響量の総和を数値化できれば、私たちの実施している生物多様性に対するポジティブな活動の成果と比較して、そのポジティブな活動がリコーとしてふさわしいレベルで実施できているのか、それともまだ足りないレベルなのかを判断することができます。

実際には地球環境に対するポジティブな活動(環境社会貢献)については、良いことだからやっているというレベルであって、私たちがどのくらい貢献できているのか数値化して把握することができていません。環境負荷削減のように、持続可能な社会実現のために必要な論理が組み立てられていないのです。こういう意味で生物多様性に対する影響の定量評価が重要な課題になってきました。

2009年8月に環境省から『生物多様性民間参画ガイドライン』が発表されるなど、生物多様性という言葉が企業の環境保全にも表れるようになってきました。リコーでも2009年3月に『生物多様性方針』を策定し、その中で生物多様性を経営課題と位置づけ、生物多様性に与える影響の大きい項目から優先して影響削減活動を進めるとともに、事業領域全体で影響の評価、把握、分析、数値目標化を行うことにしました。今進めている生物多様性への影響削減活動は、紙の調達に関わる部分と事業所の生物多様性配慮、それから環境教育への盛り込みなどです。

事業領域全体での生物多様性のネガティブな影響評価は、LCA(ライフサイクルアセスメント)の手法によって実現したいと考えています。これによりリコーの事業のステージのどこでどういう影響が発生しているか数値化し、削減施策に結びつけ、リコー全体の影響の総量を数値化します。

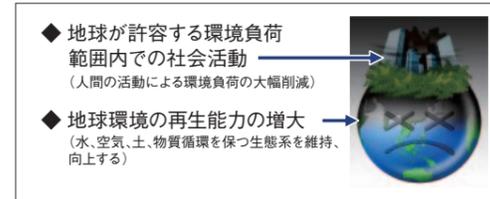


図2 持続可能な社会構築のための課題

一方、ポジティブな活動(生物多様性の保全に貢献する活動)の評価もまた難しい課題となっています。生物多様性の数値化と言ってもいろいろなレベルが考えられます。一番やりたいことは、生物多様性が豊かになったことによって増加した生態系サービス量の計量化です。活動によって地球環境にどれだけ貢献できたかという意味合いの数値です。これは非常に難しく、次善の策として、2007年にプロジェクトの実施によってどのくらい生物多様性が豊かになったかの数値化にトライしました。生物多様性には微生物や植物一つ一つの種類と個体数まで包含され、厳密に言えばこうしたものを把握することは不可能なので、代理指標として測定可能な生物種に絞って数値化するやり方で行いました。

さらに“貢献量”を出すということも難しさの要因の一つです。貢献量は活動の前と後で比較ができれば良いわけですが、実際問題として、活動前にこのような用途に使うことのできる詳細データを記録していることは少なく、他の方法を考えなくてはなりません。また、厳密な調査には費用がかかりますが、保全にかかる費用より調査の費用が多くなってしまうと本末転倒になってしまいます。

2009年にドイツ政府の提唱で進む『生態系と生物多様性の経済学』(TEEB)の国際プロジェクトチームが、熱帯林の価値を「1ha=54万円の貢献を毎年生み出している」と見積もりました。食料や薬品のもととなる植物や木材を入手できることのほか、レクリエーション的な価値、気温上昇の緩和や大気・水質の浄化、土壌流出防止などが勘案されたものです。このやり方を参考にして、リコーのプロジェクトサイトによる生物多様性の貢献を算出できないかと考えています。各地のプロジェクトサイトは熱帯林だけではないので、それぞれの森林の貢献額を算出が必要になりますが、この方法によって数値化できれば、LCAによって

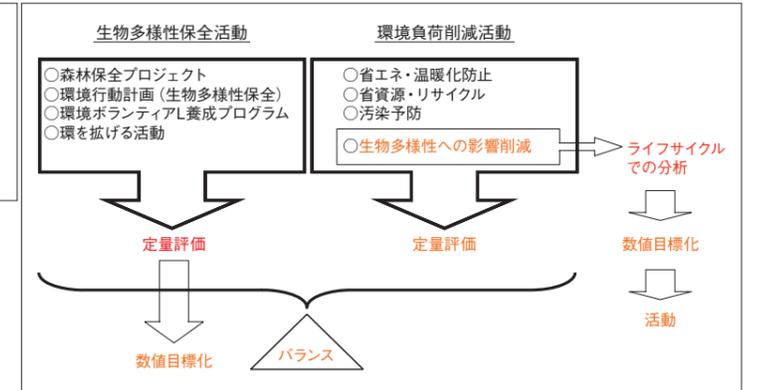


図3 リコーの生物多様性課題

算出された生物多様性への影響と比較することにより、リコーの事業による影響を超える貢献ができていないのかいないのかが判断できるのではないかと期待しています。

生物多様性の恩恵を受け続けるために

生物多様性は地球上で生き物が生きていくために必要なことであり、人間にとっても人間社会にとっても当然ながら必要なことです。当たり前のように呼吸している空気も、食べ物も、水も、気候の安定も、いろいろな原材料も、生物多様性の恩恵にあずかっています。これまでの環境保全活動も、地球の生物多様性を守るための活動と言い換えることができるかもしれません。

私たちが地球上で生活していくためには持続可能な社会を実現しなければなりません。その実現のために生物多様性の恩恵を受け続けることができるように活動をしていきたいと考えています。

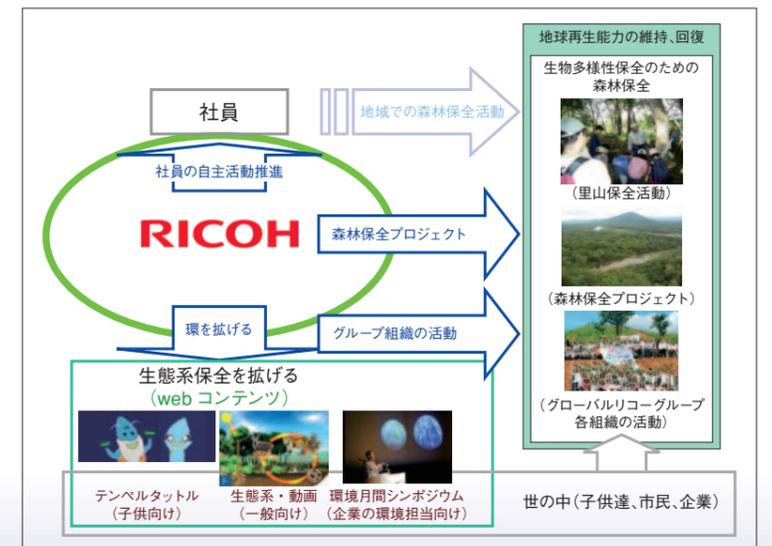


図4 リコーの生物多様性保全活動